文 化 財 学 習 会

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ　明治１５０年企画②　四国村を訪ねる

講　師　加藤　彬（四国民家博物館　学芸員）

日　時　平成３１年３月１０日（日）

共　催

高松市歴史民俗協会

高松市文化財保護協会

高松市教育委員会

目次

1 四国村について・・・・1
2 かずら橋・・・・3
3 小豆島農村歌舞伎舞台・・・・4
4 アーチ橋・・・・5
5 福井家石蔵・・・・6
6 前田家土蔵・座敷・・・・6
7 稲田家土蔵・・・・7
8 大久野島灯台・・・・8
9 江崎灯台退息所・・・・9
10 鍋島灯台退息所・・・・10
11 クダコ島灯台退息所・・・・11
12 醤油蔵・麹室・・・・12
13 異人館（ワサ・ダウン住宅）・・・・13

1　四国村について

昭和五十一年（一九七六）に源平の古戦場跡として知られる屋島山麓の地に開館した公益財団法人四国民家博物館は、主に四国各地から古民家などを収集し移築復元した野外博物館である。

約五万平方メートルの敷地には三十一棟の建物が点在し、河野家住宅や砂糖しめ小屋など、国から指定・登録を受けた建物が二十二棟あるほか、残りの建物も香川県や高松市の文化財に指定されている。また、砂糖・醤油の製造用具をはじめとした約二万点にのぼる民具資料を所蔵している。平成十四年には、世界的に有名な建築家安藤忠雄氏設計による「四国村ギャラリー」を新設し、国内外の絵画や考古遺物などを展示し、当館の新たな一面として注目を集めている。

建築史学・民俗学上非常に価値があり、屋島の豊かな自然の中で先人たちの知恵や工夫に直接触れることができる施設として「四国村」の愛称で親しまれている。

【四国村概要】

・昭和五十一年（一九七六）…財団法人四国民家博物館が開設

（一九七五年十一月二十五日設立）

・平成二十三年…公益財団法人四国民家博物館に認定

・敷地面積…約五万平方メートル

・標高…約七十メートル

・総キロ数…約二キロメートル弱

・建物…三十一棟十三基

【設立の理念】

四国四県に残存する特色ある民家を屋島山麓の当館敷地内に移築復元し、一般公開することで社会貢献をおこなう。

【入村時間】※年中無休（メンテナンス等により、臨時休業の場合有り）

・四月～十月…午前八時三十分～午後五時

・十一月～三月…午前八時三十分～午後四時三十分

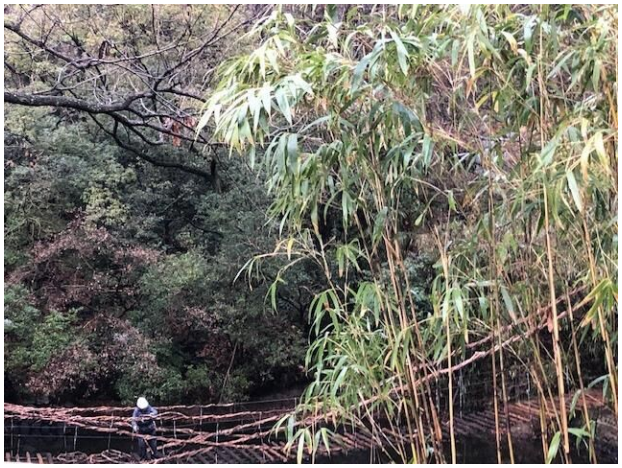
文化財種類	建造物	民具
国指定文化財	2 件	
国指定有形民俗文化財	2 件（6 棟）	6,514
県指定文化財	3 件（3 棟）	
市指定文化財	4 件（6 棟）	
登録文化財	27 件（16 棟 11 基）	

2　かずら橋

徳島県三好市西祖谷善徳にあるかずら橋（重要有形民俗文化財）の模倣物である。祖谷のかずら橋は長さ約四十五メートルに対して四国村のかずら橋は約三十メートルであり、ひとまわり小さいが、建材である「かずら」は本場祖谷から持ち込んでいる。また、かずらの架け替えを三年に一度行い、その際は祖谷からの職人による架け替え作業が行われる。最近では、平成三十一年二月一日から八日まで架け替え作業を行っていた。

かずら橋の起源は、弘法大師が祖谷に来たとき困っている村民のために架けたとか、平家の落人がこの地に潜み、追っ手が迫ってもすぐ切り落とせるように葛を使って架けたとの伝説もあるが、定かではない。

かずら橋



かずら橋架け替え作業の様子

3　小豆島農村歌舞伎舞台

文久三年（一八六三）以前

香川県小豆郡土庄町小部にあった農村歌舞伎の舞台である。寄棟造で、屋根は主に茅葺で正面は茅屋根を切り上げて、桟瓦葺の庇を付けている。また、建物の一部に江戸時代の建築物であることを示す墨書が残る。ここでは毎年十月に地元中学生による子供歌舞伎を公演するほか、端午・桃の節句に合わせて、四国村所蔵の五月人形や雛飾りの展示（平成三十一年は三月十七日まで）を行っている。

昭和五十三年（一九七八）に高松市の有形文化財に指定。

ひな飾り

小豆島農村歌舞伎舞台

4　アーチ橋　明治三十四年

この橋は、香川県高松市国分寺町新名石舟の金比羅街道沿いにあったもので、県道の拡張により昭和五十七年（一九八二）に四国村へ移築復元された。豆腐型の石を積み重ねた石造アーチ橋で、鷲ノ山から切り出された安山岩（※）が用いられており、要石部分には鯉と唐獅子の浮彫り装飾が施されている。橋には建築年と作者の銘「明治三十四年十二月築之　兎子尾与次郎　米吉」が残っている。

平成十二年に国登録有形文化財となった。

※安山岩…鷲ノ山（国分寺町南部）に産する角閃安山岩という種類の石は、古墳時代に石棺として多用され、「石舟」という地名の由来になったという。

アーチ橋

5　福井家石蔵　明治中期

国分寺町にある鷲ノ山産の安山岩（※）で造られた壁と、本瓦葺の屋根で造られた頑丈な蔵である。屋根の下地には細竹を用いる伝統的な仕様の一方で、内部の床にはレンガを敷いたモダンな仕様となっている。

アーチ橋同様香川県高松市国分寺町新名石舟の金比羅街道沿いにあったが、県道拡張に際し昭和五十七年（一九八二）年に四国村へ寄進された。

平成十二年に国登録有形文化財となった。

福井家石蔵

6　前田家土蔵・座敷　明治後期

昭和五十三年（一九七八）に高知県高知市布師田から移築復元されたこの蔵は、木造二階建て切妻造で、屋根は桟瓦葺の置屋根式である。蔵の入口横についているのは番屋と呼ばれる隠居屋と離れ座敷を兼ねたもので、このような土蔵は高知の平野部に多く見られる。

蔵の土壁には瓦を張り付けて漆喰を盛った海鼠壁と、漆喰の壁面に水切瓦（※）を数段付け、多雨豪雨地帯である高知地方特有の工法・意匠となっている。

平成十二年に国登録有形文化財となる。

※水切瓦…土壁に直接瓦を挿したもので、土壁に塗られた漆喰が雨水によって劣化損傷するのを防ぐ。

前田家土蔵

7　稲田家土蔵　明治初期

昭和五十年（一九七五）に愛媛県上浮穴郡久万町から移築復元された。蔵は木造二階建、茅葺屋根の置屋根で切妻造りである。特徴的なのは、屋根、入口や窓の戸枠、窓の庇、外壁の板などがすべて取り外し可能であること。破壊消火が主流であった近世の防火対策を十分に盛り込んだ造りになっている。

平成十二年に国登録有形文化財となった。

稲田家土蔵

8　大久野島灯台

明治二十六年（一八九三）

広島県の大久野島に建っていた灯台である。広島県向島・因島から広島県大崎上島・愛媛県大下島までを結ぶ三原瀬戸航路を照らしていた、全九つの灯台の内の一つである。円形の基礎は高さ三・八メートル、切り出した花崗岩を積んだ灯塔は高さ五・一メートル、直径三・一メートルであり、鋳鉄製の灯器は高さ二・四メートル。老朽化による改築に伴い四国村へ移築復元し、現在二代目が現役稼働している。大久野島は「ウサギの島」としても有名。

大久野島灯台

9　江崎灯台退息所　明治四年（一八七一）

退息所とは灯台守の宿舎である。江戸末期から明治初期にお抱え外国人技師により灯台技術が導入され、外国人技師が退息所を設計したため洋風の建物が多いが、その後それら退息所を真似て日本人が設計していく。

洋式灯台である江崎灯台とともに建てられた江崎灯台退息所は、兵庫県淡路島の北端にあったもので、昭和五十六年（一九八一）から無人となり、平成七年の阪神淡路大震災で半壊したことに際し、平成八年に四国村へ移築復元された。灯台は修理され現在も稼働中。

退息所は石造りで、花崗岩の切石を積んで壁を造り、木造トラスで桟瓦葺の屋根を支えている。イギリス人技師のR・H・ブラントンにより、外国人灯台守のために設計されたこの退息所は、外観のみならず内部も洋式化されている。

平成十二年に国登録有形文化財となった。

江崎灯台退息所内部

江崎灯台退息所

10　鍋島灯台退息所　明治六年（一八七三）

鍋島は、瀬戸大橋が通る与島に隣接した小島である。

鍋島灯台は洋式灯台で、退息所は翌年建てられた。建物は与島から切り出された花崗岩製で、屋根は桟瓦葺の和小屋組である。正面には円柱（オーダー）を六本立て吹き放しになっている。内部もほとんどが洋式だが、一部畳敷きである。

昭和三〇年（一九五五）頃までは退息所として使われていたが、その後海上保安部の通信施設として用いられた。平成三年に無人化したため、平成十年に四国村へ移築復元された。平成十二年に国登録有形文化財となった。江崎灯台退息所同様Ｒ・Ｈ・ブラントン設計。

Ｒ・Ｈ・ブラントン（リチャード・ヘンリー・ブラントン）はスコットランドのアバディーンという街で生まれた。

鉄道会社に勤めていたところ、英国政府から灯台技師の選任

鍋島灯台退息所内部

鍋島灯台退息所

を任されていたスティーブンソン兄弟に採用され、明治政府お抱えの灯台技師として明治元年（一八六八）に来日。日本に滞在した約八年の間に三十余りの灯台を建てたことから「日本の灯台の父」と呼ばれる。

11　クダコ島灯台退息所　明治三十六年（一九〇三）

クダコ島は、愛媛県の怒和島と中島の間にある小島。

灯台が建てられた明治三十六年（一九〇三）に同じく退息所も建てられた。

建築当初はレンガ造りで外壁はモルタル仕上げだが、現在は構造上の問題からコンクリート造になっている。屋根は桟瓦葺の和小屋組。内部は左右にほぼ対称の間取りで、二家族が居住可能となっている。内装に和風要素を多く取り込んでおり、明治初期の建築様式とは異なる。

また、別棟として風呂と倉庫を兼ねた建物を隣接する。灯台の無人化により不要となった退息所は平成八年に四国村へ移築復元された。平成十二年に国登録有形文化財となった。

クダコ灯台退息所

クダコ灯台退息所内部

12　醤油蔵・麹室

江戸時代末～明治時代末

四国村には仕込蔵二棟と麹室一棟がある。いずれも昭和五十九年（一九八四）に香川県大川郡引田町から移築復元したものである。

二棟の仕込蔵はどちらも似た造りであり、花崗岩の布石を基礎とし、切妻造本瓦葺の屋根と、漆喰塗大壁に波型軒などが共通する。西側の仕込蔵内部の柱に二階梁の痕跡が見られ、中二階が存在していたことが考えられる。東側の仕込蔵には麹室が隣接しており、蔵内部には押船と呼ばれる諸味を搾る機構を備えている。

麹室は、切妻造本瓦葺の屋根が仕込蔵の屋根面まで達していることから、一体の建物に見えるが、構造上独立したものである。麹づくりは温湿度の調整が重要であり、入口は中外の戸枠に板戸を各一枚付け、壁も二重とするなど外気の影響を受けないような工夫が見られる。

昭和六十一年（一九八六）に国指定重要有形民俗文化財となった。

醤油蔵内部

醤油蔵・麹室

13　異人館（ワサ・ダウン住宅）

明治三十八年（一九〇五）

イギリス人ウィリアム・ダウン夫妻（妻は日本人でワサ・ダウン）の住宅として、兵庫県神戸市生田区北野町に建てられた。

その後昭和十九年（一九四四）から日本郵船株式会社の社員寮として使用されてきたが、昭和四十一年（一九六六）に新たな社員寮が完成したため空き家となり、昭和五十一年（一九七六）に四国村へ移築復元された。

この建物はコロニアル様式と呼ばれる植民地時代に発展した西洋の建築様式の典型例である。木造二階建寄棟造で、屋根は桟瓦葺。正面一階は吹き放しとするが、二階ベランダにはガラス戸を立て込んだ造りになっている。

平成十二年に国登録有形文化財となった。現在は事務所・喫茶店として使用している。

異人館内部

異人館

MEMO

「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

１　交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
（必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。）

２　無理をせず、体調には十分気を付けましょう。

３　引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。

４　マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。

５　文化財や自然を大切にしましょう。